

東京女高師の地理巡検：1939年の満州旅行（2）

内田 忠賢

1. はじめに

本報告は、前稿「東京女高師の地理巡検：1939年の満州旅行（1）」¹⁾の続編、前稿以降の調査結果のレポートである。内容は2部に別れる。まず、昭和14（1939）年7・8月に実施された、東京女子高等師範学校（以下、女高師、お茶の水女子大学の前身）の「大陸視察旅行」参加者からご教示いただいた新しい情報を紹介する。これにより、前稿を補足し、修正を加える。次に、参加者から提供していただいた当時の新資料を紹介する。新資料とは、大陸旅行に先立ち、女高師の学生が作成した予習レポート、旅行の手引きである。前者では、新しい事実を知ることができただけでなく、私が先入観から推測したストーリーを訂正することができた。また、後者では、当時の女高師における地理と歴史の学習状況を知ることができた。

さて、本論に入る前に、前稿作成時以降に目にした、関連する先行研究について触れておきたい。第二次世界大戦期（および日中戦争期）を中心とした、日本人の大陸観光に関する諸研究である。

まず、中国人留学生・高媛（東京大学大学院生）による「『大東亜共栄圏』から『郷愁を誘う』旅へ：日本人の満州観光」²⁾があげられる。この論文では、日本人による満州観光を、4つの時期に分けて考察する。戦前を1932年（満州国建国）前後に、戦後を1979年（中国旅行自由化）前後に区分し、観光活動とそこに見られるツーリズムとナショナリズムの相互作用を追及した。この論文の第2章「『国民旅行』としての『興亜旅行』：『満州国』時代における『満州』観光（1932～1945）」が、本報告に直接関わる。当時「内なる外地」であった満州国への観光は、「開拓移民や武装侵略を応援する『集合的オーディエンス』の一つとして形成され、『大東亜共栄圏』のもう一つの実践形態」として働いた（同論文60頁）と、彼女は分析する。また、「アジア他民族

との連帯を唱えるこの時代の社会風潮のもとで（中略）アジア諸民族と「相提携」しようとする真摯な語りも少なくなかった」（同）とも指摘する。前稿で扱った、女高師による満州旅行の内容および参加学生の感想文からも、同様のことが確認できる。高論文は、私の前稿を手際よく整理してくれた感がある。当然ながら、女高師の満州旅行も、同時代のそれと大きく異なっていない。

この他に、メディア史を専門とする有山輝雄（成城大学教授）が、著書『海外観光旅行の誕生』の中で、新聞社主催による戦前期の大陸旅行について紹介している³⁾。彼が紹介した「満州韓国巡遊旅行」は、女高師の旅行の30年以上前、明治39（1906）年に開催されたツアーである。有山によれば、この旅行は、文明人が未開人や未開の土地を眺めるゆがんだ優越感の表象を意味するという。高論文でも、同様の指摘をしている。なお、ヘリテージ（戦跡）ツーリズムに関する戦前・戦後の比較について、荒山正彦（関西学院大学助教授）が、「戦跡とノスタルジアのあいだに：『旅順』観光をめぐる」という論文で扱っている⁴⁾。

2. 1939年の大陸旅行

詳しくは前稿に譲るが、読者の便を考え、概要のみ記しておきたい。

国家総動員法成立の翌年に実施された、朝鮮半島と満州国への大陸旅行（7月31日～8月18日、別表参照）は、40名の女高師学生と3名の教官が参加した。同行した教官のうち、中心人物は当時の地理学教授、飯本信之（1895～1989）である。あと2名は、英文学教授（津田芳雄）および化学嘱託助手（木村都）である⁵⁾。政治地理学を専門とし、その関連科目等を女高師で講じ、しかも地政学協会の常任理事を務めた飯本は、植民地の巡検には、うってつけの引率教官であった。当時の参加者も、三教官のうち飯本だけが実質的な相談役を果たしたと証言している。また、この「満鮮旅行」は、女高師の教職員と生徒の懇親会、如蘭

表1. 旅行日程 (『所感集』より)

二〇	一九	一八		一七	一六		一五	一四	一三	一二				一一	一〇	九	八										
門	同	大	水	旅	同	大	同	奉	同	撫	同	奉	同	同	新	同	吉	同	拉	同	四	同	同	同	ハ	同	
司		師	師	順	順	連	天	天	天	順	順	天	天	京	京	林	林	法	法	法	房	房	房	房	ハ	同	
着	航	發	着	發	着	發	着	發	着	發	着	發	着	發	着	發	着	發	着	發	着	發	着	發	着	發	着
早	前	前			前	後	前	後	前	後	前	後	前	在	後	前	後	後	後	後	後	前	前	前	前	前	後
朝	一・三〇	四・二〇	三・一五	九・三五	八・三五	一・三二	七・二五	二・三〇	一・三〇	八・二五	七・一〇	三・〇六	八・三五	二・一〇	二・三二	一・一九	九・三二	八・三五	五・二四	〇・二二	七・四〇	七・四〇	在	八・〇〇	九・一〇		
	同	O	同	同	同	急	急	六	六	三	三	二	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
	S	K			行	行	五	四	四	四	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	
	同	船	大		大	奉		奉		奉		同	新	吉										同	ハ	車	
	中	連			連	天		天		天		同	京	林										同	ハ	中	
		三・〇〇			三・〇〇	三・〇〇		三・〇〇		三・〇〇		三・〇〇	三・〇〇	三・〇〇	三・〇〇									三・〇〇	三・〇〇	〇・〇〇	
			〇・七〇		〇・七〇	〇・七〇		〇・七〇		〇・六〇		〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇				一・〇〇	〇・六〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	一・〇〇	
			一・四〇		一・六〇	〇・七〇		一・〇〇		〇・七〇		一・二〇	〇・五〇												一・二〇		
					急	急																					
					行	行																					
					料	料																					
					一・七五	一・七五																					

会の旅行部の行事ともなっていた。

当時、朝鮮半島は日本国内(植民地)だったが、満州国は国外であった。つまり、この大陸旅行は、朝鮮半島では国内旅行であるが、満州国では外国旅行だったのである。とはいえ、満州国は実際には日本政府の傀儡政権であったので、日本人旅行者は現地で優遇されていた。女高師の満州旅行も、文部省、陸軍省の指導の下、満州移住協会、満州開拓公社から後援があった。満州国内の旅行では、

満州帝国協和会、南満州鉄道(満鉄)からの協力があり、移動や宿舎での安全が確保されていた。この旅行から帰った後、参加者は『大陸視察旅行所感集 昭和十四年』(以下、『所感集』)を編むことになる。前稿の後半では、参加者のうち、19名が調査結果や感想を執筆した『所感集』の記述内容について、紹介と検討を行った。

月日	地	着	発	時刻	列車番號	宿泊地	宿泊料金	食費	車馬賃	其ノ他
七、三一	下關	着	發	一〇・三〇	金剛丸	船中				
八、一	釜山	着	發	六・〇〇				〇・五〇		
	佛國寺	着	發	八・四〇	七四七			〇・七〇		
	慶州	着	發	一・二二	バス(見學)	慶州			一・七〇	
	大邱	着	發	三・四〇						
二	同慶州	着	發	六・〇〇						
	同大邱	着	發	一・四八	七四七					
	同京城	着	發	一・四五						
	同京城	着	發	二・四三	四七	京在	三・〇〇	一・〇〇		
三	同京城	着	發	一〇・四五						
四	同京城	着	發	五・〇五						
	同平康	着	發	九・一〇	三一					
	同平康	着	發	一・五七					〇・五〇	
	同福溪	着	發	二・〇三						
	同福溪	着	發	五・三九	三一七	車中				
五	同清津	着	發	七・二五		清津	三・〇〇	〇・七五	一・四〇	
	同清津	着	發	八・二〇				〇・五〇		
六	同羅津	着	發	一・四五	バス					
	同羅津	着	發	三・二〇	一六三					
	同羅津	着	發	三・四〇						
七	同雄基	着	發	八・二〇	二〇二	雄基	三・〇〇			
	同雄基	着	發	一・四〇						
	同圖門	着	發	一・三八	一〇一					
	同圖門	着	發	一〇・二〇						
	牡丹江	着	發	一〇・二〇		牡丹江	三・〇〇			

3. 大陸旅行の新情報

a. 事実の確認

前述のように、女高師による「大陸視察旅行」には、学生40名が参加している。桜蔭会（女高師および、お茶の水女子大学の同窓会）の名簿（平成7年発行）および、桜蔭会事務局が把握する卒業生動向によれば、このうち21名の方がお

元気のようなのである。この21名に郵便で連絡を取ったところ、11名の方からお返事をいただいた。本章は、彼女たちと手紙の遣り取りをしたり、直接インタビューした調査結果である。前稿の作成過程で、私は次の4点を疑問に感じたので、それらを中心に参加者に質問、確認をした。

1) この旅行は、飯本の地理学講義に関連していたのか？

まず、飯本の講義を履修していたのか。次に、

旅行地について、飯本は事前に授業で扱ったのか。また、旅行への参加や報告レポート提出は、履修単位に関連していたのか。

2) 参加者が『所感集』で報告したテーマは、誰が決めたのか？

飯本が指示したのか。学生本人が自由に選択、決定したのか。また、提出後、飯本による閲読(内容チェック)があったのか。後者については、関係当局に『所感集』を提出しているの、十分ありうると推測した。

3) 旅行参加者は、どのように募集されたのか？

まず、如蘭会旅行部のメンバーだったのか。また、一番の参加動機は何か。そして、旅行に先立ち開催された、満蒙開拓青年義勇軍の関係者・加藤完爾(当時、内原青少年訓練所長)の講演会(同年4月26日)に参加したのか。

4) 参加費は徴収されたのか？

諸機関からの後援があったと『所感集』には記されるが、参加費が必要ならば、いくらだったのか。

b. 回答

1) 飯本の地理学講義との関連

この旅行には、文科、理科、家事科、体育科、つまり女高師の全学科の学生(むろん全員ではない)が参加した。当時、飯本は講義科目として「人種民族地理学」や「外国地誌」等を担当していたが、それらは文科の授業であった。しかも、履修者は地歴専攻の学生に限られていた。たとえば、参加者に含まれる国漢専攻の学生は飯本の講義を履修していない。地歴専攻だった卒業生は、飯本の「政治地理学」(昭和14年4~12月)も受講したという。これらの授業で、飯本は地政学的なアジテーションをまったく行っていない。講義内容は、世界各地の民族や地理的な情報を終始、客観的な視点から述べたものだった。飯本は、著書「政治地理学」(1929年発行、改造社)で、地政学は国家の政治活動に深く関わるのに対し、政治地理学は「国家の地理的実態および形態」を客観的に認識する分野であるという主張を展開する(同書31~38頁)が、それを地でゆく講義だったようである。なお、飯本は、昭和11年から13年にかけて、ドイツに留学しており、学生が飯本の講義に接したのは、せいぜい2年間にすぎない⁶⁾。

大陸旅行に関して、飯本は、出発の直前に、若干の説明会を開いた程度である。

旅行地については、地歴専攻の学生が自主的に学んだ。飯本は旅行先の学習に、まったく介入しなかったという。彼は、アドバイザーに徹していた。その成果は、後に紹介する冊子『歩む』(昭和14年7月15日発行)にまとめられている。また、今回の大陸旅行は、女高師の履修科目、単位とまったくリンクしていない。

2) 参加者が事前に調べ、現地で調査し、『所感集』で報告した各テーマについて、飯本は学生に対し、まったく指示しなかった。彼女たちによれば、飯本は、普段も学生の自主性を尊重していたようである。今回も、各自が選択したテーマで学習し、報告するように求めたらしい。また、提出後、飯本による閲読(内容のチェック)も、まったくなく、当局から問題が指摘されれば自分が責任を負うと言ったらしい。なお、少なくとも参加者たちが記憶する限りでは、『所感集』出版後に問題は起こっていない。

3) 如蘭会は教職員と学生の親睦団体であり、旅行部というのは特定の人々が加入する団体ではなかった。年間に数回開催される旅行の活動そのものを旅行部と称していたにすぎない。参加者は、如蘭会による大陸旅行の募集に自由に応募したようである。むろん、飯本は、この企画について、当局や学校側に多少は根回したらしいが、参加、不参加は自由だったようである。実際、予習段階で作成した冊子『歩む』の執筆者のうち、参加を取りやめた方も数人いる。参加者の証言でも、最初は参加希望であった学生の中にも、父母の反対(危険である等)等で参加を止めた学生がいた。また、上記の第1点のように、地歴専攻以外の参加者も少なくなく、一番の参加動機は各人の興味関心だったという。さらに、旅行前の加藤完爾の講演会への出席も、旅行への参加、不参加(予定)にかかわらず、自由だった。大陸旅行が実現した背景には、当局の後援だけでなく、女高師学生の父兄に政府関係者がいたらしいとの証言もある。また、参加動機として、海外を見たかった、その数少ないチャンスを生かしたかったというのが大多数だったようである。

4) 参加費は徴収されたのか？

『所感集』や如蘭会の雑誌『如蘭』には、有力な各機関から後援があったと記されるため、学生

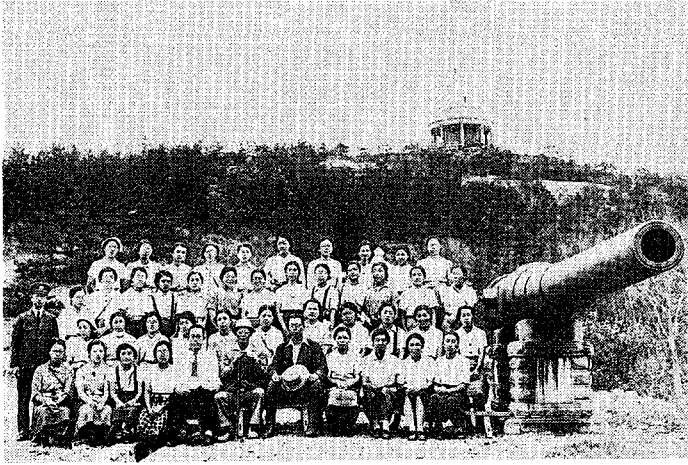


写真1
旅順白王山忠塔前
(吉岡スマ氏蔵)



写真2
平康の開拓邦人民家前
(吉岡スマ氏蔵)



写真3
場所不明 (上里和子氏蔵)

の参加費負担はまったくないだろうと私は推測したが、これはまったく間違いだった。参加者の記憶によれば、費用は当時の金額で100円だったらしい。当時の海外旅行資料を参考にすれば、大陸

旅行として、必ずしも安い金額ではなかった。ただし、比較した大陸旅行との旅行内容（宿泊先や交通手段等）の違いが不明なので、単純に高い、安いと断定できないが、関係当局が大部分を負担

した訳ではない。推測であるが、この大陸旅行は当時の旅行会社が企画に関わっており、そこで参加費が設定された可能性がある。と言うのは、『所感集』の巻頭に掲載された飯本の「満鮮視察旅行所感」は「満鮮視察旅行報告会に於いて口述せしもの」「速記」と注記されているが、その中で飯本は「ツーリスト」(ジャパン・ツーリスト・ビューロー、日本国際観光局、日本交通公社の前身)にお礼を述べている。そして、当時「ツーリスト」が設定した大陸旅行の一般的な料金と、この参加費に大きな隔たりがあまりないからである。

4. 冊子『歩む』の紹介

大陸旅行に先立ち、学生たちが自主的に執筆・編集した冊子が、『歩む』である。事前学習の成果と言えよう。今回、当時の参加者のお一人からお貸しいただいた。A5判、253頁に及ぶ大部な冊子で、立派な製本状態である。詳細な学習成果で、当時の女高師学生の学習レベルの高さを物語っている。発行年月日は、大陸視察旅行に先立つ昭和14年7月15日とあり、文科の地歴専攻学生3年生が作成した。発行兼編集者は、文科3年代表の那須生代、横尾清香、丸山英子、志村貞子の4名である。目次は、以下のとおりである(括弧内は執筆者、原文は旧字体、*は旅行に不参加)。

第1編 歴史

1. 満州現在政治の一、二について(渡邊淑子)
2. 日韓併合に至るまで(武藤佳枝)
3. 満州、朝鮮の風俗と習慣(白石暢子)
4. 満州における宗教(高橋津留子)
5. 朝鮮における宗教(大浦郁子*)
6. 満州の建築(宮本静子)
7. 朝鮮の美術(中村スマ、白土ワカ子*)

第2編 地理

1. 満州の気候、地勢、地質(大坂みね子)
2. 朝鮮の地質、地形、気候(吉村勇)
3. 満州における産業(宗清アサ子)
4. 朝鮮における産業(大坪節子)
5. 満州における交通(八杉清香)
6. 朝鮮及び満州の都邑(発田鈴子、松岡英子)

第3編 満州農業移民について

(横尾清香、丸山英子*、那須生代)

個別の内容については、おそらく当時の内地で得られる知識の整理なので紹介を省略する。淡々と学習内容を記述するのみで、イデオロギー的な発言は、ほとんどない。この冊子を通読して、気づいたことを数点、指摘したい。以下、若干批判めいた書き方をすることを、お許しいただきたい。内容は執筆者本人の責任ではなく、当時の社会背景や教育内容によるものである。

第一に、歴史編(第1編)では、中国東北部(満州地域)や朝鮮半島の本래の歴史事象について、あまり触れていない点である。特に、中国東北部の歴史については、ほとんど紹介していない。たとえば、第1章の付記では「なお、満州国歴史は、東洋史を御覧になることをお願いいたします」(11頁)とあるのみである。また、第6章第1節では、時代順に漢、高句麗、北魏、渤海、遼、金、清と記されるが、建築物に関する短い情報を列挙したにすぎない。当時の女高師でも、中国史については講じられていたので、学習していないか、軽視していたと推測せざるをえない。軽視と言うのが適当でないとすれば、大陸を訪れるに際して、現地の歴史は重要ではないという雰囲気がある当時の教育課程にあったのかもしれない。なお、歴史編第7章では、朝鮮半島美術史について、ある程度、頁数を取って、時代順にまとめている。

第二に、歴史編、地理編(第2編)を通して、現地の諸民族について、さほど触れていない点である。少なくとも、満州地域には多くの民族が生活しており、そのため、表向きとはいえ、満州国政府や関東軍が五族協和の理想を唱えたのである。生活文化を描くはずの歴史編第3章では、満州地域について、食物、被服類、吉凶事の風習、年中行事、嗜好と嫌悪という5節が立てられ、記述されるが、民族別に紹介されることはない。同第4章(宗教)第6節(シャーマン)で、ようやく「在来の満州族や一部の蒙古人、その他北部の少数民族」(53頁)と触れる程度である。なお、同第6章第2節では、満州地域の民家について、欧風、和洋折衷風、朝鮮式のカテゴリーと、支那系、満州族系、蒙古包系のカテゴリーに分類している。

第三に、事前学習に際し、参考にした文献が限られている可能性がある点である。各章末の参考文献リストから判断すると、執筆者が参照したネタ本が同じだったと推測できる。歴史編では、主に改造社発行の『世界地理風俗大系満州編』、『日

本地理風俗大系朝鮮編』(当時、朝鮮半島は日本領だったため日本の一部として扱われた)である。したがって、現在から見れば、上述の2点のような偏りを指摘できるが、仕方があるまい。他には、谷山つる子『満州の習俗と伝説・神話』、杉本文雄『満州とはどんな所か』等が参考文献に挙げられている。

第四に、歴史編、地理編と並列して、満州移民について1章を割いた点である(第3章)。今回の大陸旅行に関し、学生の最大の関心が満州移民であったことを推測できる。とはいえ、上で指摘したように、イデオロギー色は、ほとんどない。この章に割いたボリュームも、23頁と、全体のわずか9%である。参考文献は明示されない。章構成として、「1.集団農業移民入植関係表」、「2.衣食住に就いて」、「3.農業経営要素に就いて」、「4.移住地の農家暦」、「結語」の5節が立てられ、「結語」を除けば、統計数値および学習した事実関係を淡々と記述するのみである。1頁(252・253頁)にすぎない「結語」では、満州国と日本にとって移民が重要であること、中国人に比べ、日本人や朝鮮半島の人々の入植が必ずしも進んでいないこと、が述べられる。ここで、時代背景を受けた発言を「結語」から引用しておきたい。わずかに記されたイデオロギー的発言である。

「即ちこの状態(中国人に比べ、日本人や朝鮮半島の人々の入植が必ずしも進んでいないこと)が続けば、貴き先人達の血の犠牲により、浄められ固められた地は、我々後続の者の、熱と意気との如何によって、五族協和の理想より、我々日本人を除いた四族協和の現実に墜する事は、実に明瞭な事実である。かく思ひ來る時、家を捨て、妻を捨て、子を捨てて、祖国(日本)の為に、我々の為に、更に東洋の為に満州の土と消えさつた魂の前に、一時も早く五百万人の平和の戦士を送り出して開發と共に、国境線の確保、鉄道沿線の守備等につとめる事こそ、我々の最初にとるべき道であらう」(253頁、原文は旧字体、括弧内筆者)

5. おわりに

以上、1939年に実施された女高師の大陸旅行に関し、前稿以降の調査結果について記した。当時の参加者からご教示いただくことで、前稿を大幅に修正できた。特に、政治地理学者の飯本教授

が同行したため、彼の意向が強く反映していると推測したことは、証言によれば、まったくの誤りであった。私は「地理巡検」と題したものの、地理学者が本格的に企画したのではなく、学生が自主的に企画、あるいは、当局や旅行社が企画に深く関わった可能性が高い。また、新しい資料も入手でき、紹介できた。旅行史や地理教育史の観点から、今後も、継続して、関連資料の調査を行いたい。

私の目論みでは、女高師の大陸旅行を、近年流行するポストコロニアリズムの文脈でも語れるのではないかと期待していたが、今のところ、それはできそうにない。なるほど、ポストコロニアリズムの流れに乗る諸論文の中には、わずかな活字史料から、論者に都合の良いストーリーに強引に展開させているものも散見する。当時の関係者へのインタビューから得られる情報が、必ずしも当時の「事実」であったとは限らないが、裏を取る作業が重要だと感じさせる調査であった。

最後に、1939年の大陸旅行に関する調査の継続はもちろん、お茶の水女子大学地理学教室の歴史について、今後も注目していきたいと考えている。

謝辞

本報告は、この大陸旅行に参加された、以下の元女高師学生の先輩方のご協力により作成できました。心よりお礼申し上げます。なお、()内は旧姓、[]内は参加当時の所属・学年です。

赤澤(菊地)園江氏 [体育科3年]
上里(前田)和子氏 [文科4年]
佐藤(福山)直子氏 [体育科3年]
佐藤(川村)房子氏 [体育科3年]
篠崎(北条)悦子氏 [文科4年]
田中(大谷)豊子氏 [家事科3年]
寺田(伊藤)静子氏 [理科4年]
中(須藤)美子氏 [文科4年]
永井(乙骨)菊枝氏 [文科4年]
吉岡(中村)スマ氏 [文科3年]
牧野(大坪)節子氏 [文科3年]

註・文献

1) 内田忠賢「東京女高師の地理巡検：1939年の

- 満州旅行 (2) 『お茶の水地理』第42号, 31～36頁.
- 2) 高媛 (1998) 「『大東亜共栄圏』から「郷愁を誘う」旅へ：日本人の満州観光」『旅の文化研究所研究紀要』第6号, 57～68頁.
- 3) 有山輝雄 (2002) 『海外観光旅行の誕生』(歴史文化ライブラリー134) 吉川弘文館, 30～88頁.
- 4) 荒山正彦 (2001) 「戦跡とノスタルジアのあいだに：「旅順」観光をめぐる」人文論究 (関西学院大学) 第50巻4号, 1～16頁.
- 5) 当時の参加者, 永井 (乙骨) 菊枝氏によれば, 宇井という家事科教授 (由井テイ?) も参加したらしいが, 『所感集』に登場せず, 確認はできなかった.
- 6) 竹内啓一・正井泰夫 「戦前の思い出：飯本信之先生に聞く」竹内・正井編 『地理学を学ぶ』古今書院, 1986年, 129頁.
- 7) 『満支旅行年鑑』昭和14年版 (林重夫編, ツーリスト満州支部発行) によれば, 下関-釜山-京城-安東-奉天-撫順-新京-哈爾濱-大連-旅順-門司の13日間コースが, 2等団体161円5銭, 3等団体が103円99銭である。荒山正彦氏による (人文地理学会2001年度大会報告配布資料).
- (付記) 入稿後, 奈良女子高等師範学校 (現・奈良女子大学) も, 昭和14年に朝鮮半島・満州国に修学旅行に出掛けていることがわかった。その記録 (手書き) は, 奈良女子大学のホームページで資料として公開されている。両女高師の大陸旅行の比較も今後の課題である。

うちだ・ただよし
お茶の水女子大学助教授